

Title	ナルシシズム性人格に関する一研究：自尊感情の水準及び不安定性との関係についての実証的研究
Author(s)	相澤, 直樹
Citation	大阪大学教育学年報. 5 P.99-P.111
Issue Date	2000-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/4536
DOI	10.18910/4536
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ナルシズム性人格に関する一研究

- 自尊感情の水準及び不安定性との関係についての実証的研究 -

相澤直樹

【要旨】

本研究の目的は、ナルシズム性人格と自尊感情の関係を検討することにある。まず、ナルシズム性人格構造の考察から、自尊感情の高低水準だけでなく不安定性を考慮する必要が示唆されたので、自尊感情の不安定性の測定法として、「自尊感情の反復評定法」と「不安定性の自己報告法」を用いた。また、従来論じられてきたナルシズム性人格の2特性として「無関心性」と「過剰警戒性」を取り上げ、それぞれを測定する尺度として「ナルシシスティックパーソナリティ尺度」と「対人恐怖心性尺度」を用いた。以上の尺度を青年期の男女に実施した。その結果、反復評定法を用いた分析において、ナルシシスティックパーソナリティ尺度の「統率性・他者の操作因子」と「自己恥溺因子」、及び、対人恐怖心性尺度の「否定的な公的自意識因子」において、自尊感情の不安定性との間に有意な正の関係が検証された。しかし、自己報告法を用いた分析では、明確な結果は得られなかった。以上の結果について考察を行い、今後の展望を論じた。

I：目的

ナルシズムという用語が「自己愛」と邦訳されるように、ナルシズムは自尊感情と関係の深い概念である。また、ナルキッソス神話の主人公の（泉に映る自らの姿を愛する）イメージからも、ナルシストは自分のことをこよなく愛している人と理解されることが多い。しかし、ナルシズムは自尊感情と同一の概念ではない。むしろ、DSM-IV (APA 1994) の中に、「ナルシズム性人格障害」という診断基準が設けられているように、その程度が強まれば心理的な障害にもつながるような自己感情の様態である。それでは、ナルシズム性人格と自尊感情とはどのような関係にあるのか、その点を実証的に検討することが本研究の目的である。

II：ナルシズム性人格の人格構造

ナルシズム性人格 (Narcissistic Personality) の人格構造に関しては、従来さまざまな研究者によって論じられてきた。その主なものとして、KernbergとKohutによる研究が挙げられよう。

O.Kernberg (1982,1985) は、Jacobsonの精神分析的発達論とMahlerの乳幼児分離個体化理論に依拠して、ナルシズム性人格障害の人格構造を論じている。それによると、この人格障害では、内的世界が「陽性の自己-対象表象」と「陰性の自己-対象表象」に分割され

ている初期段階から、対象表象の情緒的恒常性が達成されるに至る過程に問題が生じる。そのため、陽性の自己-対象表象はすべて自己表象に取り込まれて「病的な誇大自己」を形成し、陰性の自己-対象表象は他者に投影されて、空虚で攻撃的な対象表象を形成する。このように病的に歪められた人格構造がナルシズム性人格障害の臨床像を形成する。一方、H.Kohut (1971,1977) は、蒼古的誇大感・万能感を乳幼児に生得的なものとして仮定する。それはやがて誇大的顕示的自己イメージと理想化された親イマージへと変化し、最終的には2つの自己評価調節機能（健全な野心と現実的な理想）を形成することになる。しかし、その過程で幼児が深刻な傷つきを体験すると、2つの蒼古的な誇大感・万能感がそのまま残存しナルシズム性人格障害の諸症状を形成することになる。

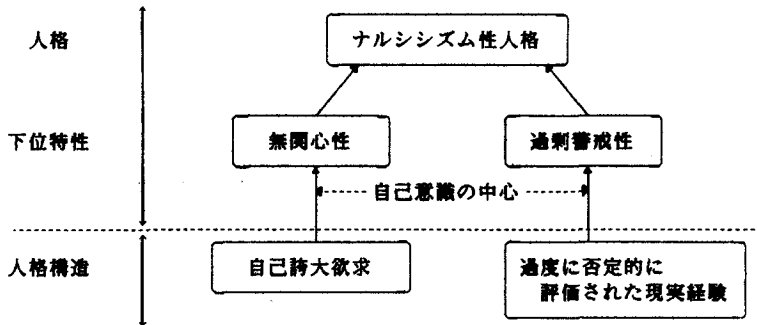
両者の理論は、ともにナルシズム性人格の基底に「自己誇大欲求」を見いだしている点で共通している。したがって、少なくとも、ナルシズム性人格とは自己誇大欲求によってもたらされる性格傾向であると言える。一般に自己誇大欲求が強いと、次のような事態が推測される。自己誇大欲求とは「自分を理想化したい、万能であると思いたい」という欲求であるから、それと比較して、日常生活での現実的な経験は過度に否定的で受け入れがたいものとして経験される。それゆえ、「自己誇大欲求」と「それに比して否定的に評価された現実経験」という「2極構造」が生じてくるであろう。この「2極構造」が、以下に述べるようなナルシズム性人格の諸特徴を形成するものと考えられる。換言すれば、ナルシズム性人格とは、自分を理想化したい欲求が強いために、現実経験が否定的で受け入れ難く感じられる人のことなのである。ただし、ナルシズム性人格そのものが病的なものかといえば、必ずしもそうではない。自己誇大欲求は決して病的なものではなく、「自分を理想化したい」と願う気持ちは一般に広く認められるものであろう。それ故、ナルシズム性人格も、程度の差はあれ一般健常者の中にも認められると考えられる。

Ⅲ：ナルシズム性人格の諸特徴と人格構造

従来の研究では、ナルシズム性人格の行動的・性格的特徴として、自己誇大感や万能感、他者への共感性の低さ等が指摘されることが多かった。しかし、Gabbard (1994) は、臨床観察からナルシズム性人格障害に「無関心なナルシスト」と「警戒過剰なナルシスト」の二つのタイプがあることを指摘した。前者は、傲慢で攻撃的、自己中心的、注目願望、自己主張性、他者への鈍感さなどを特徴とするナルシストであり、後者は、傷つきやすさ、内気、自己抑制的、注目回避、他者への過敏さなどを特徴とするナルシストである。ただ、Gabbard自身も「多くの患者は2つのタイプの混合した現象の様相を呈する（邦訳 p91）」と指摘するように、それらの特徴は一人のナルシズム性人格の中に共存することが多い。その意味では、ナルシズム性人格の2つのタイプとするよりも、ナルシズム性人格に含まれる2つの特性と位置づける方が妥当であろう。そこで、両者をナルシズム性人格における「無関心性」及び「過剰警戒性」として概念化する。

このナルシズム性人格の2特性と人格構造における2極構造は、相互に対応関係にある

ものと考えられる。つまり、傲慢さ、攻撃性、自己中心性などを特徴とする無関心性は、人格構造における誇大自己欲求から生じ、一方、傷つきやすさ、内気、自己抑制的などを特徴とする過剰警戒性は、過度に否定的に評価された現実経験から生じてくると考えられる。そして、それらが混在するかたちで一つのナルシズム性人格が形成される。ただし、両特性が必ずしも同程度に混在するとは限らない。なぜなら、2極構造のどちらが個人の自己意識の中心に位置付くかについては、個人差が考えられるからである。ある人は、自己誇大欲求の方を意識することが多く、無関心性が優位なナルシズム性人格を示すかもしれない。また、他の人は、否定的な現実経験の方ばかりを気にするために、過剰警戒性が優位なナルシズム性人格を示すかもしれない。その意味で、ナルシズム性人格と言っても、個人によってその現れ方が異なってくると考えられるのである。以上のような関係をまとめると、(図1)のように表現することができる。



(図1) ナルシズム性人格の諸特徴と人格構造

IV：ナルシズム性人格と自尊感情

以上のように自己誇大欲求と否定的に評価された現実経験の2極構造を仮定すると、自尊感情との関係については以下のように推測できる。つまり、ナルシズム性人格では、自尊感情は2極構造の間で基本的に不安定なものになると考えられる。ここで、自尊感情の不安定性がナルシズム性人格を理解するうえでの重要な要因として浮かび上がってくる。ただし、前述したナルシズム性人格の個人差を考慮すると、無関心性と過剰警戒性では自尊感情の不安定性の現れ方が次のように異なってくると考えられる。つまり、2極構造のうち自己誇大欲求の方に自己意識の中心が向けられれば、誇大的・万能的な自己像と、傲慢さや自己中心性を中心とする行動特徴が前面化して、無関心性の諸特徴を強く示すものと推測される。その場合、日常的には肯定的な水準にある自尊感情が、否定的な現実経験に直面して一時的に過度に否定的な水準へ低下するという形で、自尊感情の不安定性が生じるであろう。

したがって、「自尊感情の水準が肯定的で、かつ、不安定性の高い人が最も強い無関心性の特性を示すであろう」と推測される。一方で、過小評価された現実経験の方に自己意識の中心が向けられれば、否定的な自己像と、内気や自己抑制性などを中心とする行動特徴が前面化して、過剰警戒性の諸特徴を強く示すことになるかと推測される。その場合、日常的には否定的な水準にある自尊感情が、自己誇大欲求の影響で一時的に肯定的な水準へと上昇するという形で、不安定性が現れるであろう。それゆえに、「自尊感情の水準が否定的で、かつ、不安定性の高い人が最も強い過剰警戒性の特性を示すであろう」と推測される。

V：方法

本研究では、ナルシズム性人格の特性として無関心性と過剰警戒性の二つを取り上げた。無関心性は、DSMの「ナルシズム性人格障害」の基準に類似していることから、それに準拠する形で一般健常者のナルシズムを測定するために作成された、RaskinとHall（1979）による「ナルシスティック・パーソナリティ・インベントリー（NPI）」を用いた。過剰警戒性については、岡野（1998）が「対人恐怖」との類似性を指摘していることから、相澤（1997）によって一般健常者の対人恐怖的心性を測定するために作成された「対人恐怖心性尺度」を用いた。

両尺度を含め、以下の尺度群からなる調査質問用紙を一般の青年期男女を対象に実施した。

- ①Raskin&Hall（1979）によるNPIの大石（堀・山本・松井編1994）による邦訳版
- ②相澤（1997）による対人恐怖心性尺度
- ③Rosenberg（1965）の自尊感情尺度の山本・松井・山成（1982）による邦訳版
- ④Kernis et al（1989）による自尊感情の安定性の測定法に準拠した、5日間反復評定法による自尊感情の不安定性尺度
- ⑤Kernis et al（1993）による自尊感情の安定性の測定法に準拠した、自己報告法による自尊感情の不安定性尺度

なお、③は被験者の自尊感情の水準（高低）を評定するためのものである。また、④の反復評定法は、被験者が1週間の内5日、夜間にRosenbergの自尊感情尺度を繰り返し評定する方法である。また、⑤に関しては、Rosenbergの自尊感情尺度の各項目に対し、その安定性を5段階で評定させる方法を用いた。

VI：結果

A. 調査期間と対象

本調査は1997年6月～11月の期間に実施された。回収された質問紙のうち、反復評定法において1週間以内に4回以上自尊感情評定を行った被験者のみを分析の対象とした。その結果、有効回答数は147（男性57女性90、年齢平均21.3標準偏差1.7）となった。

B. 因子分析

本研究の被験者数では、各尺度の因子分析を実施する上で被験者数の不足が懸念された。そこで、並行して実施していた同様の調査質問紙（反復評定期間が2日間である点を除いては、本調査と基本的に同様である）から得られたデータと併せて、272人の回答結果をもとに因子分析を行った。

- ①NPI・・・各項目の項目分析（度数分布、項目—総得点間相関の検討）を行った結果、15項目が削除された。残りの39項目に斜交回転（プロマックス法）による主成分分析を施した結果、内容的に妥当な因子構造として5因子構造が抽出された。因子負荷が0.35以下の6項目を削除し、再度主成分分析を施して、最終的な5因子構造が確定された（表1）。信頼性係数は0.82であった。

（表1）NPIの主成分分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子「権威願望・注目願望」					
44. 私は、注目的になってみたいという気持ちがある。	.70	.24	.31	.33	-.01
12. どちらかと言えば、私は注目される人間になりたい。	.64	.25	.43	.42	.02
38. 私は支那人が強い方だと思う。	.62	.40	.23	.22	-.05
13. 私は必ず成功してみせる。	.61	.16	.21	.29	.08
48. 私はえらい人だと言われる人間になりたい。	.58	.34	.08	.19	-.04 (他6項目)
第2因子「統率性・他者の操作」					
15. 私は良いリーダーになれる自信がある。	.29	.79	.13	.35	.40
47. 私はもともとリーダーになるのが性格に合っている。	.33	.68	.17	.42	-.01
19. 自分の思い通りに人を動かすことは、それほど難しいことではない。	.17	.54	.25	.11	.11
14. 私は才能に恵まれた人間だと思う。	.26	.53	.13	.35	.40 (他3項目)
第3因子「自己耽溺」					
21. 私は自分の体を人に自慢したいという気持ちがある。	.22	.23	.69	.15	.08
42. 私は鏡を見るのが好きだ。	.26	-.10	.69	.02	.16
19. 私は自分の体を見るのが好きだ。	.07	.37	.66	.15	.14 (他3項目)
第4因子「主張性・顕示性」					
33. いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう。	.16	.24	.20	.77	.17
32. 人は誰でも私の話を喜んで聞きたがる。	.12	.10	.24	.63	.37 (他2項目)
第5因子「特権性・特殊性」					
49. 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる。	.09	.13	.09	.00	.64
22. 私には、人の気持ちをずばり読みとる力があると思う。	.19	.02	.09	.31	.61
41. 人に好かれるのは、私自身にどこか能力的なところがあるからだと思う。	.06	.14	.21	.00	.50 (他2項目)

②対人恐怖心性尺度・・・NPIと同様の項目分析を行ったが、問題のある項目はなかった。そこで、全項目に対し直交回転（バリマックス法）による主成分分析を施した結果、内容的に妥当な因子構造として6因子構造が抽出された。因子負荷量が0.4以下の3項目を削除し、再度主成分分析を施して、最終的な6因子構造が確定された（表2）。信頼性係数は0.93であった。

（表2）対人恐怖心性尺度の主成分分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
第1因子「対人場面における違和感」						
03. 人と心を聞いて替えることができない。	.83	.07	.09	.18	.15	.02
26. 人と心から打ち解けて話ることができない。	.81	.06	.13	.08	.12	.11
01. 人と本当になじめない。	.72	.21	.12	.25	.14	-.07
10. 人と自然につき合えない。	.65	.26	.26	.13	.25	.19(他3項目)
第2因子「否定的な公的自意識」						
24. 人が集まって笑いあったりしていると、自分のことが笑われているように思えてしまう。	.09	.73	.14	.05	.06	.02
30. 周りの人に、自分が実な人に見られているのではないかと不安になる。	.05	.67	.13	.48	.00	.08
07. 人といると、自分の表情などが実ではないかと、強い不安を感じる。	.27	.55	.17	.17	.06	.08
35. 何か注意されたりちょっと叱られただけで気が振戻しめじめになる。	.17	.53	-.02	.25	.17	.04(他3項目)
第3因子「異性に対する心的苦痛」						
37. 異性の人と話ができない。	.24	.10	.83	.12	.06	.16
38. 異性といると、特に緊張する。	.16	.15	.80	.07	.08	.26
11. 異性に近づきたいにもかかわらず、避けてしまう。	.20	.05	.70	.24	.19	.14(他2項目)
第4因子「他者優位」						
23. 自信が持てず相手次第になってしまう。	.09	.19	.21	.62	.17	.17
32. 周りの人に認められたいができない。	.14	.22	.19	.62	.06	.13
31. 人との差に間が空き、蓋せなくなることがありつらい。	.26	.13	.36	.57	.13	.05(他2項目)
第5因子「多数の人に対する心的苦痛」						
09. 人が大勢いると、圧倒されてしまう。	.04	.15	.15	.07	.78	.13
13. 人が集まっているところには行きづらい。	.31	.11	.15	.02	.72	.05(他3項目)
第6因子「対人場面における身体反応」						
18. 人といるとき、顔がこわばったり赤くなって緊張する。	.10	.15	.12	.16	.07	.81
16. 人と対応するとき、顔がこわばったり赤くなるのではないかと怖い。	.14	.12	.16	.23	.27	.70(他1項目)

C. 自尊感情の不安定性尺度

- ①反復評定法・・・反復評定法に基づく自尊感情の不安定性得点としては、各被験者内の5回～4回分の自尊感情評定総得点の標準偏差値を用いた。平均値は2.81、標準偏差は2.03であった。
- ②自己報告法・・・各項目の度数分布では、極端に分布に問題がある項目はなかった。また、項目－総得点間相関ではおおむね0.4以上の値を示し、全10項目の信頼性係数も0.79を示した。そこで比較的十分な内的一貫性をもつものと解釈し、総得点を用いて不安定性の測度とした。

D. NPIと自尊感情の関係

①反復評定法による測度を用いて

NPIと自尊感情の関係を検討するために、NPIの総得点と各因子得点を目的変数とし、自尊感情の水準と不安定性を要因とする、平均値の2要因分散分析を行った。群分割には上位下位各50人を基準とした。結果を(表3)に示す。平均値の値は、第4因

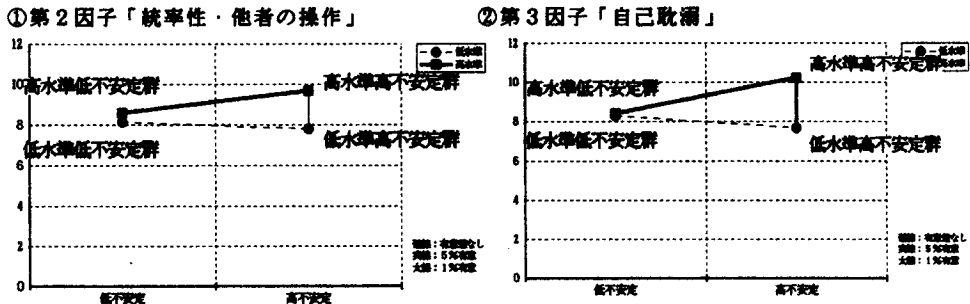
(表3) NPI各得点の2要因分散分析(1) (不安定性の測度:反復評定法)

①総得点			②第1因子(誠実性・注目願望)			③第2因子(統率性・他者の操作)		
自尊感情の水準			自尊感情の水準			自尊感情の水準		
不安定	低	高	不安定	低	高	不安定	低	高
低	43.71	46.81	低	15.64	16.68	低	8.14	8.59
高	42.25	49.92	高	15.79	17.38	高	7.79	9.69
→→						(5%有意な交互作用)		
④第3因子(記号)			⑤第4因子(主観性・顕示性)			⑥第5因子(特殊性・背離性)		
自尊感情の水準			自尊感情の水準			自尊感情の水準		
不安定	低	高	不安定	低	高	不安定	低	高
低	8.29	8.41	低	5.07	5.77	低	6.57	7.14
高	7.67	10.23	高	4.88	5.77	高	6.12	6.85
(1%有意な交互作用)			→→			→		

*→: 1%有意な主効果 →: 5%有意な主効果
 *被験者数: 低水準低不安定: 14 高水準低不安定: 22 (総得点では21) 低水準高不安定: 24 高水準高不安定: 13

子及び第5因子以外のすべての得点で、高水準-高不安定群が最も高い値を示した。しかし、検定の結果では、総得点、第4因子、第5因子で水準の主効果のみ有意となり、自尊感情が高い人の方が得点が高いことが示された{総得点 $F(1,68)=17.28p<.01$, $F_4 F(1,69)=7.32p<.01$, $F_5 F(1,69)=4.64p<.05$ }。一方、第2因子「統率性・他者の操作」と第3因子「自己耽溺」で有意な交互作用が検出された{ $F_2 F(1,69)=3.97p<.05$, $F_3 F(1,69)=9.20p<.01$ }ので、単純主効果の検定を行った(図2)。その結果、両因子において、高水準-高不安定群が高水準-低不安定群、及び、低水準-高不安定群よりも有意に高い平均値を示すことが検証された。この結果から、高水準-高不安定群が、高水準-低不安定群と低水準-高不安定群よりも強い「統率性・他者の操作」と「自己耽溺」を表すこ

(図2) NPI得点の単純主効果の検定(不安定性の測度:反復評定法)



とが示唆された。

②自己報告法による測度を用いて

自己報告法による不安定性の測度を用いて、同様の2要因分散分析を行った。結果を(表4)に示す。平均値の値自体は高水準-低不安定群が最も高い値を示した。検定の結果、第1因子、第2因子、第4因子において水準の主効果のみが有意となり、自尊感情が高いほど各因子の得点が高いことが示された{F1 F(1,70)=4.94p<.01,F2 F(1,70)=9.49p<.01,F4 F(1,70)=12.54p<.01}。総得点、第3因子、第4因子では有意な交互作用がみられたので、単純主効果の検定を行った。しかし、高水準-高不安定群と高水準-低不安定群の間に有意な差は検証されなかった。

(表4) NPI各得点の2要因分散分析(2)(不安定性の測度:自己報告法)

①総得点			②第1因子(権威願望・注目願望)			③第2因子(統率性・他者の操作)		
自尊感情の水準			自尊感情の水準			自尊感情の水準		
不安定		低 高	不安定		低 高	不安定		低 高
低	37.92	47.54	低	14.00	16.81	低	7.25	9.00
高	42.93	44.88	高	15.64	15.75	高	7.82	8.38
(1%有意な交互作用)			→			→		
④第3因子(自己観)			⑤第4因子(主張性・顕示性)			⑥第5因子(特殊性・特権性)		
自尊感情の水準			自尊感情の水準			自尊感情の水準		
不安定		低 高	不安定		低 高	不安定		低 高
低	6.67	8.81	低	4.50	5.85	低	6.57	7.14
高	8.04	8.38	高	5.00	5.88	高	6.12	6.85
(5%有意な交互作用)			→			(5%有意な交互作用)		

*→:1%有意な主効果 →:5%有意な主効果
 *就職者数:低水準低不安定:12 高水準低不安定:26 低水準高不安定:28 高水準高不安定:8

E. 対人恐怖心性尺度と自尊感情の関係

①反復評定法による測度を用いて

対人恐怖心性尺度と自尊感情の関係を検討するために、対人恐怖心性尺度の総得点、及び、各因子得点を目的変数とし、自尊感情の水準と不安定性を2要因とする、平均値の2要因分散分析を行った。群分割の基準は上位下位各50人を用いた。結果を(表5)に示す。平均値の値は、第3因子と第5因子以外は、低水準-高不安定群が最も高い値を示した。しかし、第2因子「否定的な公的自意識」以外のすべての得点で水準の主効果のみが有意となり{総得点 F(1,70)=26.48p<.01,F1 F(1,70)=14.31p<.01,F3 F(1,70)=6.71p<.05,F4 F(1,70)=31.17p<.01,F5 F(1,70)=14.66p<.01,F6 F(1,70)=4.59p<.05}、自尊感情の低い人ほど対人恐怖心性が強いことが示された。一方、第2因子「否定的な公的自意識」においては、自尊感情の水準の主効果、不安定性の主効果がともに有意となった{F(1,70)=18.93p<.01,F(1,70)=7.82p<.01}。したがって自尊感情が低い人ほど、また不安定性が高い人ほど、強い「否定的な公的自意識」を抱えていることが検証された。

②自己報告法による測度を用いて

自己報告法による自尊感情の不安定性得点を用いて、同様の2要因分散分析を行った。

(表5) 対人恐怖心性尺度各得点の2要因分散分析(1) (不安定性の測定: 反復評定法)

① 総得点			② 第1因子 (対人場面における違和感)			③ 第2因子 (否定的な公的自意識)		
自尊感情の水準			自尊感情の水準			自尊感情の水準		
不安定		低 高	不安定		低 高	不安定		低 高
低	110.29	85.43	低	20.71	16.09	低	20.71	19.14
高	115.54	89.92	高	21.62	17.07	高	28.00	22.57
←←			←←			←←		
④ 第3因子 (異性に対する心的苦痛)			⑤ 第4因子 (他者地位)			⑥ 第5因子 (多数の人に対する心的苦痛)		
自尊感情の水準			自尊感情の水準			自尊感情の水準		
不安定		低 高	不安定		低 高	不安定		低 高
低	16.00	12.73	低	22.71	16.81	低	18.42	13.95
高	15.62	13.07	高	24.79	17.43	高	17.42	14.07
←←			←←			←←		
⑦ 第6因子 (対人場面における身体反応)			*→: 1%有意な主効果 →: 5%有意な主効果 *被験者数: 低水準低不安定: 14 高水準低不安定: 22 (総得点では21) 低水準高不安定: 24 高水準高不安定: 14 (総得点では13)					
自尊感情の水準								
不安定		低 高						
低	8.07	7.05						
高	8.08	6.07						
←←								

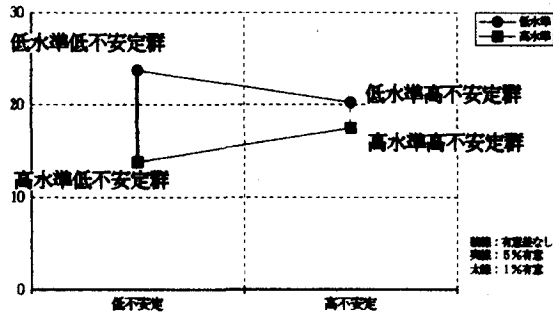
(表6) 対人恐怖心性尺度各得点の2要因分散分析(2) (不安定性の測定: 自己報告法)

① 総得点			② 第1因子 (対人場面における違和感)			③ 第2因子 (否定的な公的自意識)		
自尊感情の水準			自尊感情の水準			自尊感情の水準		
不安定		低 高	不安定		低 高	不安定		低 高
低	121.08	78.50	低	23.75	13.85	低	29.25	18.81
高	110.57	91.75	高	20.25	17.50	高	26.50	21.50
(1%有意な交互作用)			(1%有意な交互作用)			(5%有意な交互作用)		
←←			←←			←←		
④ 第3因子 (異性に対する心的苦痛)			⑤ 第4因子 (他者地位)			⑥ 第5因子 (多数の人に対する心的苦痛)		
自尊感情の水準			自尊感情の水準			自尊感情の水準		
不安定		低 高	不安定		低 高	不安定		低 高
低	16.25	12.04	低	25.17	15.07	低	18.25	13.22
高	15.68	12.50	高	23.04	18.00	高	17.21	15.00
←←			(5%有意な交互作用)			←←		
⑦ 第6因子 (対人場面における身体反応)			*→: 1%有意な主効果 →: 5%有意な主効果 *被験者数: 低水準低不安定: 12 高水準低不安定: 27 (総得点では26) 低水準高不安定: 28 高水準高不安定: 8					
自尊感情の水準								
不安定		低 高						
低	8.42	6.11						
高	7.89	7.25						
←←								

その結果を(表6)に示す。平均値の値は、すべての得点において低水準-低不安定群が最も高い値を示した。検定の結果、水準の主効果のみが有意となったのは、第3因子、第5因子、第6因子であった{F3 F(1,70)=8.84p<.01, F5 F(1,70)=8.60p<.01, F6 F(1,70)=4.63o<.05}。総得点、第1因子、第2因子、第4因子では有意な交互作用が見られた{総得点 F(1,70)=5.81p<.05, F1 F(1,70)=8.60p<.01, F2 F(1,70)=4.06p<.05, F4

$F(1,70)=4.03p<.05$ 。単純主効果の検定結果、不安定性の効果が見られたのは第1因子「対人場面における違和感」のみであり、低水準-低不安定群が低水準-高不安定群と高水準-低不安定群よりも強い「対人場面における違和感」を抱えていることが示唆された(図3)。

(図3) 対人恐怖心性尺度得点の単純主効果の検定(不安定性の測度:自己報告法)
①第2因子「対人場面における違和感」



VII: 考察

A. NPIと自尊感情の関係について

本研究では「自尊感情が高く、かつ、不安定な人が最も強い無関心性の特性を示すであろう」との仮説のもとに、自尊感情の水準と不安定性の2要因でNPI得点の平均値の分散分析を行った。その結果、反復評定法による不安定性の測度を用いた場合、第2因子「統率性・他者の操作」と第3因子「自己耽溺」で仮説を支持する結果を得た。しかし、総得点や他の因子得点では不安定性の有意な効果は見られなかった。これらの結果については次のように考察できる。

まず、第2因子「統率性・他者の操作」に有意な結果が見られた点についてであるが、この因子に含まれる項目は、人間関係でリーダーシップや他者操作を発揮する行動特性を表している。ただ、それらの行動特性は、北山(1995)が「相互協調的自己観」として指摘するような日本の文化的背景のものでは、否定的な評価を受ける場合が多いと思われる。特に他者操作は自分のために他者を動かすという集団不適応的な態度であろう。そのため他者からの否定的なフィードバックを受ける可能性があり、それが自尊感情の不安定性をより顕著にした可能性がある。次に、第3因子「自己耽溺」に有意な結果が見られた点については、調査対象が青年期の男女であったことと関係すると思われる。この因子に含まれる項目は、自分の容姿への自信や身体的魅力への耽溺を意味するものである。青年期は一般に成熟した異性関係を形成することが重要な発達課題となっており、自己の身体的な魅力の重要性が高まる時期である(山本他1982)。それゆえ、青年期の自己誇大欲求は身体的魅力への陶醉という形で最も現れやすく、それだけナルシズム性人格構造との関係が密接であったと考えら

れる。そのために、不安定性と「自己耽溺」の関係も比較的検出されやすかったものと考えられる。

B：対人恐怖心性尺度と自尊感情の関係について

本研究では「自尊感情が低く、かつ、不安定な人が最も強い過剰警戒性の特性を示すであろう」との仮説に基づき、対人恐怖心性尺度の各得点の平均値に対し2要因分散分析を行った。その結果、反復評定法を自尊感情の不安定性の測度として用いた分析で、第2因子「否定的な公的自意識」に仮説を支持する結果を得た。この結果については以下のように考察できる。

第2因子に含まれる項目群は、他者からの否定的な評価に対する予期的な不安で構成されている。したがって、この特性は他者からの評価への過敏性を高める結果となりやすく、もとから不安定な自尊感情をより不安定なものにしやすい。そのような相互作用のために、不安定性との関係が最も検出されやすかったのではないかと考えられる。また、ナルシズム性人格という観点から見た場合、次のことが言える。各下位因子の内容をみると、この因子にナルシズム性人格構造の特徴（自己誇大欲求があるために現実的経験が過度に否定的なものとしてとらえられる）が最も明瞭に反映されていることが分かる。それに対し、他の因子の意味する身体反応や行動特徴は、否定的な公的自意識から精神交互作用として知られる悪循環（森田1960）を通じて生じ得るものであるとしても、ナルシズム性人格構造に対しては二次的な発生要因である。このようなナルシズム性人格との関係の差異が、他の因子に有意な結果が得られなかったことの一つの要因であるとも考えられる。

C：反復評定法と自己報告法の結果の差異について

本研究では、自尊感情の不安定性の測定法として反復評定法と自己報告法を用いたが、両者は異なった結果を示した。この結果については以下のように考察できる。

前述のように、ナルシズム性人格では、自己誇大欲求と否定的に評価された現実経験の2極構造があると論じた。さらに、自己意識の中心が、自己誇大欲求と否定的な現実経験のどちらに向けられるかによって、無関心性と過剰警戒性のどちらが強くと示されるかに個人差が生じると推測した。つまり、前者では誇大な自己意識に不一致な経験は無視や忘却される可能性が生じるであろうし、後者では否定的な現実経験に不一致な自己誇大欲求そのものが否認されやすい傾向が生じると考えられる。この背景の下で、測定法による違いが生じてきたものと思われる。つまり、反復評定法では、その時その場の自尊感情を評定する訳であるから、否認や忘却の影響を受けにくく、自尊感情の変化を抽出することができたと考えられる。それに対し、自己報告法では、日常的な経験を回顧的に内省する被験者の働きが介在してくる。そのため、被験者の否認や忘却の影響を受けやすく、不安定性の効果が現れなかったり、逆に低水準に安定していると評定する人と対人恐怖心性の関係が有意に検出されたのではないかと考えられる。以上のように、被験者の否認や忘却の働きによって今回の結果がもたらされたものと推測される。

VIII：総括と今後の展望

本研究では、自尊感情の不安定性という視点を導入して、ナルシズム性人格と自尊感情の関係を検討した。その結果、反復評定法を用いた分析で、部分的に仮説を支持する結果が得られた。このことは、ナルシズム性人格の背後に不安定な自尊感情が潜んでいることを示唆している。しかし、自己報告法を用いた分析では、仮説を支持するような結果は得られなかった。その点については、被験者の否認や忘却などの影響が考察された。

ただ、今回の調査で有意な結果が限定されたものとなったことには、調査方法や尺度構成の問題が関係していると思われる。まず、自尊感情の不安定性の測定方法の問題が上げられる。この点については、実施条件の統制、測定方法の簡略化等が今後の課題であろう。また、ナルシズム尺度の問題も考慮される必要がある。無関心性のナルシズムの測定に関してはNP Iが既に開発されているが、過剰警戒性の測定法に関しては、筆者の知る限り信頼し得る尺度が未開発のようである。その点も、今後のナルシズム研究にとって重要な課題であろう。

<参考文献>

- 相澤 直樹 1997 「対人場面における対人恐怖的な悩みの分析」『日本教育心理学会第39回総会発表論文集』548
- American Psychiatric Association 1994 高橋他訳 1995 『DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引き』医学書院
- Gabbard,G 1994 館訳 1997 『精神力動的精神医学—その臨床実践[DSM-IV版]—③臨床編：Ⅱ軸障害』岩崎学術出版社
- 堀 洋道・山本 真理子・松井 豊 1994 『心理尺度ファイル—人間と社会を測る—』垣内出版
- Kernberg, O. 1982 小此木訳 1984 「自己愛」『岩波講座 精神の科学 別巻』岩波書店
- Kernberg, O. 1985 *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*, Jason Anderson, New York
- Kernis, M., Grannemann, B., & Barclay, L. 1989 "Stability and Level of Self-Esteem as Predictors of Anger Arousal and Hostility", *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 1013-1022
- Kernis, M., Cornell, D., Sun, C., Berry, A., & Harlow, T. 1993 "There's More to Self-Esteem Than It Is High or Low: The Importance of Stability of Self-Esteem", *Journal of Personality and Social Psychology*, 65-6, 1190-1204
- 北山 忍 1995 「文化的自己観と心理的プロセス」『社会心理学研究』10,153-167
- Kohut,H. 1971 水野・笠原監訳 1994 『自己の分析』みすず書房
- Kohut,H. 1977 本城・笠原監訳 1995 『自己の修復』みすず書房
- 森田 正馬 1960 『神経質の本態とその療法』白揚社
- 岡野 憲一郎 1998 『恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで—』岩崎学術出版社
- Raskin, R. & Hall, C. 1979 "A Narcissistic Personality Inventory", *Psychological reports*, 45, 590
- Rosenberg, M. 1965 *Society and Adolescence Self-Images*, Princeton Univ.press.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 1982 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30,64-68

A Study on Narcissistic Personality -In Relationship to Level and Instability of Self-Esteem-

Naoki AIZAWA

This study examined the relations between narcissistic personality and self-esteem. Based on the premise that positive relationship would be found between narcissism and instability of self-esteem, the hypotheses were as follows: High and unstable self-esteem is associated with oblivious trait of narcissistic personality and low and unstable self-esteem is associated with hypervigilant trait. As measures of instability of self-esteem, repeated assessments of self-esteem and self-rated method of instability were administered to the subjects. Narcissistic Personality Inventory and “Taijin-kyofu (Fear of interpersonal relationships)” Scale were used to assess the two traits of narcissistic personality, oblivious and hypervigilant, seen in non-clinical population. The hypotheses were partly supported utilizing repeated assessments. However, findings from self-rated instability indicated contradictory results. The findings were discussed from the perspective of the defense mechanism, and further exploration was addressed.